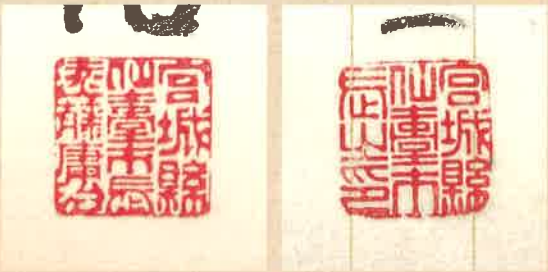
ISSN 1880-585X

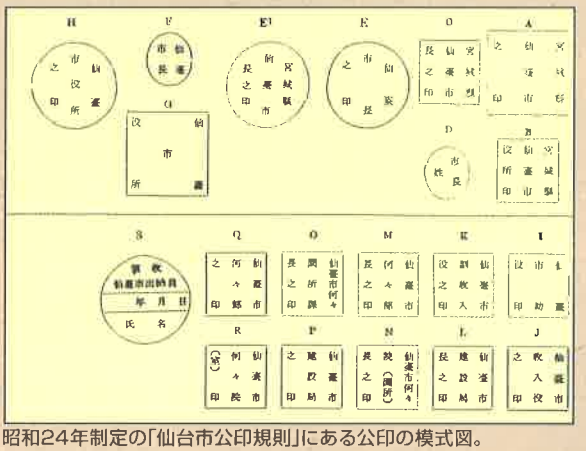
sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第21号
仙台市博物館
市史編さん室



かつて使われた市長印(原寸大)
左:市制施行のころ使われた印
右:大正期に使われた印



昭和24年制定の「仙台市公印規則」にある公印の模式図。
この後、公印は増加の一途をたどる

モノがたり 仙台

仙台市長印と市政の拡大

仙台市が誕生したのは、明治22年(1889)。今年はそれから120年目、いわば、仙台市は還暦を2回重ねたことになります。

市制施行当時の仙台市の人口は、資料によって数値は異なりますが、ざっと7万人程度と推定されます。それが現在、約103万人と、およそ15倍になっています。もっとも、この間、仙台市は何度も周辺市町村との合併を繰り返しており、面積も約17平方キロメートルから約788平方キロメートルへと46倍あまりになっています。そこで、比較の基準を変えて、明治22年における現仙台市域の人口をみると約13万人ですので、120年後の現在は8倍に増えたことになります。同じ期間における日本全体の人口の伸びは3.3倍、宮城県の人口の伸びは3.1倍ですから、いかに仙台が大きな発展を遂げたかがよくわかります。

この仙台市の行政を担った市役所の職員数をみると、明治22年は、書記5、附属員53、使丁10と、市長などを加えても70人程度でした。後に仙台市に合併されることになる14町村の役場職員の人数については、正確には把握できていませんが、明治30年における名取郡中田村の職員が、村長・助役・議員・教員を除いて8人だったことから、1町村10人あまりと概算してそれほど間違ってはいないでしょう。つまり、仙台市と14町村の職員総数はざっと250人前後であったと思われます。

一方、現在の仙台市職員数は、非正規職員(嘱託・臨時職員やアルバイトなど)を除いて約9,500人となっています。ガスや上下水道、地下鉄・バスといった、当時は影も形も無かった事業が加わったといっても、行政に携わる職員数の伸びは38倍とすさまじいものがあります。近代化や都市問題の拡大、近年の住民ニーズの多様化の中で、市役所が所管する職務がいかに増加したかがわかるでしょう。

市役所の機能が多様化したことを象徴的にあらわすものに公印、すなわち仙台市の公文書に捺(お)されるハンコがあります。市制施行当時の公文書を見ると、捺されているのは「宮城県仙臺市長遠藤庸治」と刻まれた、縦横ともに2.1センチメートルの小ぶりな印です。

その後、大正期になると、同じ大きさで市長の個人名のない「宮城県仙臺市長之印」と刻まれた印が使われています。戦前の仙台市の規定には、公印の保管に関する規定はあるものの、公印の種類や使い分けに関するものは見えないことから、戦前の仙台市で市長名で出される文書に使われる印はほぼ1種類であったとみて良いように思われます。

ところが、現在「仙台市」「仙台市長」と刻まれた印は66種類。ほかに各区の区長や副市長、あるいは市長や区長の職務代理者の印も相当の数に上ることから、仙台市の公印の数は驚くほどの数になっています。ここにも行政が果たす機能が著しく拡大した状況が反映されているのでしょう。

今から120年後、市長公印はいったいどうなっているのかを想像してみるのも楽しいですね。

現在使われている市長印の一つ
「仙台市長」と横書きされている

m 現在の橋の標高
m 橋付近の広瀬川の標高

広瀬川を渡る！

― 橋がつなぐ人びとの暮らし

仙台市の中心を流れる広瀬川は各所に切り立つ断崖が多く見られ、橋を架けることが困難な川でした。この広瀬川を人びとがいかにして渡り、生活していたのかを紹介します。

現在工事が進められている地下鉄東西線の広瀬川橋りょう　平成21年5月

市街を分断する高い崖

澱橋下の崖　上に見える第二師団長官舎との差は約20メートル(仙台市博物館蔵)

JR仙台駅前の標高は約36メートル。桜ケ岡公園(西公園)の標高は約46メートルあり、直下の広瀬川との高低差は22メートルを超え、切り立った崖となっています。広瀬川の河岸段丘上に立地する仙台市では、愛宕橋あたりまでの川岸には断続的に崖が見られ、渓谷と言っても過言ではないくらいです。

これらの崖は、かつては仙台城を守る天然の城壁としての機能をもつ一方で、人びとの通行を困難にしてきました。藩政期にも大橋や澱(よどみ)橋など、城下から城へ通じるいくつかの橋が架けられていましたが、洪水などにより流されることもしばしばでした。

都市計画と幻の橋

大正14年(1925)、仙台市は隣接する名取郡長町・宮城郡原町・同郡七郷村南小泉ほかを含めた「仙台都市計画区域」を決定しました。翌年発行された『仙台市土地宝典索引』には、その初期に計画された街路が示されています。

その計画街路のひとつに、仙台駅前から清水小路(現在の愛宕上杉通)を延長し、愛宕山のふもとに通じる街路と橋が示されています。つまり、昭和50年(1975)に完成する愛宕大橋の構想が、その60年も前にあったことになります。このほかにも、石名坂から根岸へ渡る橋、また南小泉松原から長町八本松へ渡る橋などが示されていることから、当時の市街地である河原町を経由せずに長町へ向かうバイパスを建設しようという目的がうかがわれます。

なお、計画はその後何度も見直され、昭和4年(1929)に作られた『大仙台都市計画街路図』になると愛宕橋付近の計画街路は示されておらず、幻となってしまいました。

川によって分かたれた町と町を、いかにつないで都市を発展させようとしたか、当時の都市計画からその思いが伝わってきます。

『仙台市土地宝典索引』にみえる仙台市街地東南部(仙台市博物館蔵)

強固な橋を求めて

昔は仲の瀬や宮沢などには民営の木橋が架けられ、渡るのに料金がいることから「一銭橋」ともいわれていました。洪水で橋が流れてしまったときには同じ料金で渡し舟の営業も行い、利用者の足を確保していました。

明治22年(1889)の水害で大橋・澱橋・広瀬橋が被害をうけたことから、軍の要望もあり、明治25年にまず大橋と澱橋が鉄橋として架け替えられました。次いで明治42年には、日本最初の鉄筋コンクリート橋として広瀬橋が完成しています。

愛宕橋は明治36年(1903)に架けられた吊り橋でしたが、大正4年(1915)に橋脚をれんがに替え、さらに昭和10年(1935)にコンクリート橋となりました。やはり吊り橋だった霊屋(おたまや)橋も同じ年にコンクリート橋に架け替えられました。

戦後、昭和41年に千代大橋、昭和50年に愛宕大橋、昭和58年には昭和31年に完成した仲ノ瀬橋を組み入れた仙台西道路に直結する2層式の新仲の瀬橋、と相ついで大きな橋がつくられました。

平成5年(1993)には広瀬川最長の370メートルを誇る仙台南部道路の広瀬大橋が完成しています。

昭和8年ころの愛宕橋(個人蔵)

鉄橋(右)の横に架けられた新しい澱橋(左)
昭和40年6月(河北新報社蔵)

広瀬川と東北産業博覧会

昭和3年(1928)に、市内川内・桜ケ岡公園・榴岡公園を会場として東北産業博覧会が開催されました。とくに第一会場である川内と第二会場である仲の町は広瀬川の両岸にまたがるため、二つの会場を最短でつなぐ橋を急いでつくることになりました。

そこで、昭和2年9月11日から第二師団の工兵第二大隊400余人が総出で架橋工事を始め、わずか20日間で木造の中の瀬橋(工兵橋)が完成しました。この橋はいくどか洪水で破損しながらも長く利用されましたが、老朽化にともない昭和31年(1956)にその役目を終えました。

また、博覧会では中の瀬橋に隣接して架空ケーブルカー(ロープウェイ)も設けられました。客車(ゴンドラ)1台の定員は8名で、料金は大人片道30銭(往復50銭)・子供片道15銭(往復20銭)。中州に作られた矢野動物園のにぎわいや、中の瀬橋を行き交う人びと、桜ヶ岡公園側の崖から広瀬川に滑走するウォーターシュートなどを眺める約5分間の空の旅をたくさんの人が楽しんだことでしょう。

東北産業博覧会案内図にみえる中の瀬橋とケーブルカー
『河北新報創刊70年　東北大博覧会記録』(河北新報社、昭和42年)より

中の瀬橋の工事風景(個人蔵)

仲の瀬の渡し(個人蔵)
吊り橋だったころの霊屋橋(個人蔵)

施設探訪

仙台市農業園芸センター

沈床花壇(手前)と東北最大級の大温室(奥)

仙台駅からバスに揺られること約30分。海風そよぐ麦畑と水田の中にぽっかりと姿を現したガラス張りの大きなドームが、仙台市農業園芸センターの大温室です。

前身は明治33年(1900)、伊達家15代当主・邦宗が農業振興のために現若林区役所付近に開園した「養種園」までさかのぼります。その後、宮城県農会などの管理を経て、昭和18年(1943)に仙台市農会が土地・付帯設備などを借り受けて(昭和31年に買収)「仙台養種園」となり、昭和23年には「仙台市指導農場養種園」として、戦中戦後の厳しい時勢下での食糧増産を目的とする農業技術の研究指導を担いました。やがて目的の中心が市民園芸普及へと移り、昭和41年には「仙台市養種園」と改称されます。

この養種園が若林区役所建設のために閉園し、その役割を引き継ぐかたちで平成元年(1989)に開園したのが、仙台市農業園芸センターです。同センターには、養種園にあった花木の多くが移植され、現在も梅の古木などが健在です。この梅の花を観る会や、バラまつりといった季節に応じての催し物は毎年、多くの市民でにぎわい、園芸に関する講座や相談コーナーも人気です。そして、これら園芸部門事業と並んで充実しているのが農業部門事業です。土に触れて収穫の喜びを体験できる「市民農園」、都市農業を支えるサポーターを養成する「せんだい農楽校」、農家等との交流を通して地産地消への関心を深めてもらう「地産地消推進サポーター」などの各種農業支援事業がおこなわれています。

梅園。花の見ごろは3月下旬

秋バラ鑑賞会は、例年10月頃に開催

農業振興を目指した「養種園」が、「仙台市養種園」で園芸中心に移り、農業園芸センターで再び農業支援事業に重きが置かれることになったという変遷は、時代の流れを反映したものといえるでしょう。

仙台市農業園芸センター

仙台市若林区荒井字切新田13-1
TEL:022-288-0811

開園時間 9:00～16:45(大温室は16:30まで)

休園日 毎週月曜日、祝日の翌日(ただし、その日が祝休日にあたる場合は開園)
12月29日から1月3日まで

大温室入館料 ＊団体は30人以上

区分	個人	団体
大人	400円	320円
小中学生	200円	160円

交通案内 仙台駅前西口市営バスプール⑥より農業園芸センター行に乗車

仙台市史　最新刊好評発売中!

第27回配本 通史編7 近代2

◆オールカラー　A5判　585頁
◆定価3,000円（本体2,858円）

市民が体験した大正から昭和前期の時代を豊富なカラー図版とともに解き明かします。

宮城県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発　売　元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181
FAX 022-235-7183
お問合せ先／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074

続刊予定
通史編／現代1～2
特別編／慶長遣欧使節
別　編／地域誌、年表・索引

通史編／3,000円(本体2,858円)
資料編／4,000円(本体3,810円)
特別編／6,000円(本体5,715円)
※板碑のみ5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます

【通史編１】原始　※改訂版とセットとなります
【通史編２】古代中世
【通史編３】近世1
【通史編４】近世2
【通史編５】近世3
【通史編６】近代1
【通史編７】近代2
【資料編１】古代中世
【資料編２】近世1　藩政
【資料編３】近世2　城下町
【資料編４】近世3　村落
【資料編５】近代現代1　交通建設
【資料編６】近代現代2　産業経済
【資料編７】近代現代3　社会生活
【資料編８】近代現代4　政治・行政・財政
【資料編９】仙台藩の文学芸能
【資料編10】伊達政宗文書1
【資料編11】伊達政宗文書2
【資料編12】伊達政宗文書3
【資料編13】伊達政宗文書4
【特別編１】自然
【特別編２】考古資料　※完売しました
【特別編３】美術工芸
【特別編４】市民生活
【特別編５】板碑
【特別編６】民俗
【特別編７】城館

お知らせ

「通史編1　原始　旧石器時代」（改訂版）の刊行について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ちください。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

仙台市博物館休館のお知らせ
2009.8.31～2010.4.19

展示室のリニューアル及び耐震工事のため、上記の期間は休館となります。ご不便をおかけいたしますが、ご了承くださいますようお願いいたします。

せんだい市史通信 第21号

発行年月日／平成21年7月31日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

再生紙を使用しています